
思春期スイッチ。

乾 弘毅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思春期スイッチ。

【Nコード】

N8198Y

【作者名】

乾 弘毅

【あらすじ】

やたらお金のかかるバレエを辞め、これからは充実した学生生活と安定した進路を目指そうと猛勉強の末に主席で高校に入学した梶川愛。

あるときバレエを続けていたら…、なんて自分にも誰にも言われたくないから、勉強も友達も恋愛も、ぜったいぜったいガンバるのだ、と健気なカンジで生徒会長の伊藤和也の思春期スイッチを連打するお話です。

1. 順風満帆なようで前途多難かもしれない

入学式で新入生代表の挨拶をするという晴れ舞台から梶川愛の高校生活は始まった。

ぜひこの調子で順風満帆な3年間を送りたいと思います。

にやり。

高校生活を充実させるために部活やったほうが良いかなあ、と松村さんと話していたら、たまたま通りかかった中井さんに「新入生代表は創己会に入るんでしょ」と言われた。

ソウキカイ？機会部とかなんか？とは違うよね。

「生徒会執行部。3年間ずっとではないかもしれないけど、1年生の間は創己会所属のはずだよ」

知らなかった。

中井さんは3年生に創己会所属のお兄さんがいるので詳しいらしい。「でも先生にはなんにも言われてないよ」と言ったら、お兄さんに確認してくれることになった。

中井さんによく似た雰囲気眼鏡男子に案内されて創己会室に行くと、そこには3人の先輩がいた。

この4人以外は行事や会議があるときしか顔出さない人がほとんどらしい。

3人の中のひとは入学式で在校生代表挨拶をした生徒会長の伊藤和也先輩だったのですぐ分かった。

マッチョ系イケメンという名の壁、と記憶したので忘れることはないでしょう。

あとの女子ふたりはまだ覚えられない。

名前は覚えた。

どっちかが副会長の三井香奈先輩でもうひとりが書記の藤井紗英先輩。

中井さんのお兄さんは会計だそうだ。

ところで伊藤先輩の機嫌の悪さがハンパない。

ただ黙ってるだけなのに空気がピリピリして、三井先輩も藤井先輩もずっと腫れ物に触るように接している。

私のせい？なわけないよね初対面だもん。

なんかものすっごいめんどくさいカンジ。

「中井先輩、伊藤先輩の思春期スイッチが押されていて怖いので帰って良いですか？」

小さな声で言っただつもりだったのに聞こえたらしい。それまでそっぽを向いていた伊藤先輩とバッチリ目が合ってしまった。

やばい。

身の危険を感じたのでとりあえず何事もなかったかのように笑ってごまかした後そのまま退室した。

そして人生最速のダッシュで帰宅した。

きつと初めてあった新入生のことなんて次回までには忘れてくれると思います。

2。蝶の夢

お昼休みは学校探検がてらあちこちでお弁当を食べることにしている。

学校通の中井友美ちゃんに案内役をしてもらって、入学試験で仲良くなった松村有里ちゃんと、同じ中学出身の山口美幸ちゃんとで食べます。

今日は体育館のステージの端っこ。

体育館は飲食禁止ですが、ステージ脇は人が来ない絶好の隠れ家だそうです。

校内放送もちゃんと流れています。

「あ。蝶の夢だ！梶川愛、踊ります！」

スピーカーから流れてきたのは、最後のバレエコンクールで踊った曲だった。

幼稚園から始めたモダンバレエは2年ちょっと前まで私の生活のほとんどだった。

8月のイベント公演、9月の発表会、10月の芸術祭、11月の海外公演、12月のクリスマス公演、1月には教室選考があつて、選ばれれば2月からのコンクールが全国までいけば3月末まで続くことになる。

お金がかかっていることは分かっていたけど、ひとりっ子だから大丈夫なのかな？と深く考えたことはなかった。

中1から中2に進級した春休み、お父さんに「話がある」と言われて初めて知った。

私のバレエのせいで家にはもうお金がなかった。

「お前が本気でバレエを続けるつもりなら今後は借金でもなんでもして賄ってやる」そう言ってくれた。バレエ教室をかえても良い、宝塚音楽学校を受験したって良い、でも学生らしい生活のない人生

を選ぶことに後悔がないかだけが気掛かりだ、よく考えなさい。

それまでは、このままバレエを続けながら高校に行つて、卒業したらバレエ教室の推薦枠でロシアに留学して、帰ってきたらバレエ教室の先生になるもんだとばかり思っていた。

でもそれはそれでものすごく贅沢なことで、ちゃんとした考えもなしに選んで良いことではなかったことに、私はそのとき初めて気づいた。

よく考えて、高校生になることにした。

優秀な高校生になって、学生らしい生活もバツチリ堪能して、できれば推薦入試で国立大学に入って、奨学金で薬剤師とか安定感のある職につきたい。

お父さんお母さん見ていてください。愛は2人に後悔はさせませんよ。

バレエは大好き。

でも私にはもつと違う生き方もあるはずだ。

ニーアップをふわりと決めたら足の甲が痛かった。

悲しいような、いっそ清々しいような。

踊り終わって、くるくるーとターンでみんなのところに戻ると、おや？人が増えている。

中井真先輩と伊藤和也先輩だ。
がーん。

…ぜったいどっかでパンツ見えてるわー。

3. ミシンかたかたシュークリーム

1年生で創己会に入ったのは私だけ、人材育成枠なので実務ではなく雑用が主な仕事です。

今は5月に行われる運動会に向け、創己会のネーム入り腕章を製作中。

イマドキ女子は縫い物が苦手らしく、おかげで自宅から持ち込んだロックミシンとコンピュータータミシンで基地をつくり大変居心地の良い空間のなかひとりで作業しております。

腕章なんて、バレー時代に作らされたブツに比べればギャザーもないスパンコールもないし、ちよろいモノですよ。おほほほほ。

「ご苦労様。ゴメンね手伝えなくて。シュークリーム買ってきたしコーヒー入れるから休憩して?」

優しい三井先輩がさらさらの髪を揺らしながら甘やかしてくれたりもするし。

創己会サイコー!

高校生活サイコー!

高カロリーサイコー!

コーヒーにも砂糖とミルクをたっぷり入れてあまあまにするのだ。うふふ。

目の前で中井先輩が「入れすぎ!」と呟こうが伊藤先輩がどん引いていようが気にしない気にしない。

むしろ手をつけないならそのシュークリームも私にちょうだいちょうだいなのだ。

ニコニコと笑顔をはりつけたまま、まずは中井先輩をロックオン。

「…欲しいの?」

うんうんうん。

じゃあ…、と中井先輩がお皿をこちらに差し出してくれようとしたとき「待て」と伊藤先輩の声がした。

「俺のをやる」

なぜかどこかで思春期スイッチを押されたらしくめんどくさいカンジに機嫌が悪くなっている。

中井先輩しか見てなかったので全然気づかなかったけど、何がスイッチだったんだろ？

伊藤先輩の機嫌が悪いと室内の雰囲気が悪くなるので今後の対策のために何がスイッチか分かると良いんだけど？

でもせっかくなので気が変わらないうちにいただけるモノはいただく。うふっ。

中井先輩と伊藤先輩のシュークリームがのった皿を左右の手にひとつずつ持って「三井先輩、コーヒーおかわりくださいねっ？」と振り向くと、三井先輩がどこかでおもしろスイッチを押されたらしく、やたらとバカウケ中だった。

4. 私たちは違う道を選んだ

美波ちゃんが訪ねてきた。

「愛ちゃん……」

私の顔を見たときたん泣き出した美波ちゃんを私は抱きしめた。

「大丈夫だよ。泣かないで」

美波ちゃんは私がバレエを辞めてから2年連続センターを踊っている。今年のコンクールではソロパートも付いた。でも残念ながら結果は期待されたほどではなかったそうだ。

そのことで他の研究生にずいぶんつらく当たられているらしい。

「もし連絡があったら、できれば励ましてやってほしいの」と美波ちゃんのお母さんに電話で頼まれたのは、4月になったばかりのことだった。

私がセンターだったときにはむしろ美波ちゃんが私をイビリ倒していた。

お嬢様育ちで悪気はないんだろうけど、それなりに悪意を感じる人でした。

……。
もう過去の話です。

それに高校生のいまセンターで踊るということは、バレエ教室のリーダーであるということ、それは中学生の私がセンターだった時よりもはるかに重たい意味を持っている。

だから、お世話になったバレエ教室の先生たちのためにも、私は彼女を励まして前を向かせなくてはいけないと思う。

「ねえ美波ちゃん、中1の時のコンクールで踊った蝶の夢を覚えて

る？あれからもうずいぶんたったよね。私はバレエを辞めて、美波ちゃんはずっとバレエを続けてきた。いまの私はもうニーアップも上手くできないし、美しいポアントもできない。でも美波ちゃんは違うよね？いまの美波ちゃんがセンターなのは、努力を続けてきたからだよ。私がセンターだった時より、他の誰より、その場所が相応しいからだよ？」

美波ちゃんは、本当はいない私と自分を比べて苦しんでいる。

バレエを辞めずにたゆまぬ努力を続けて高校1年生になった梶川愛。

そんな人はどこにもいない。

そのことを、ちゃんと理解しないといけない。

美波ちゃんも私も。

私たちは、違う道を選んだんだ。

5. 伊藤先輩は基本良い先輩です

「運動会の前に新入生テストがあるからゴールデンウィークに私の家でお泊り勉強会しない？」と友美ちゃんが誘ってくれた。

お泊り会！行く行く！

すっごい楽しみー。

「なんか良いことでもあったのか？」

めずらしく機嫌の良い伊藤先輩に聞かれた。

伊藤先輩は気がつくと突然不機嫌になってたりして時々すごいめんどくさいカンジになるけど、基本優しくて良い先輩だということがだんだん分かってきました。

自分は食べないのにカワイイ後輩のために毎日おやつを持ってきてくれたりします。

…いや、別に餌付けされてないですよ。

「えへへー、ゴールデンウィークに友美ちゃんたちとお泊り会なんですよ。友達のお家にお泊りなんて初めてなのですっごいすっごい楽しみなんです」

そうか、良かったな。と微笑む伊藤先輩の後ろで、なぜか慌てた様子の中井先輩が唇に指で作ったバツ印をあてている。

はて？

それで誰の家に泊めてもらうんだ？と続ける伊藤先輩に「中井家で」と答えると、なぜか物凄い速さで扉まで移動した中井先輩を伊藤先輩がじっと見つめた。

「…ただの勉強会だよ」

「…」

「別にワザと黙ってたわけではないし」

「…」

「…」

「…」

「…お前も泊まりに来る？」

「考えておこう」

なんかいま緊迫してたなー、と思いながら伊藤先輩が剥いてくれた一口サイズのチョコレートをもうひとつ食べた。

6. 初恋のお話

お泊り会初日。

伊藤先輩も中井先輩の部屋にお泊りにきていた。

友美ちゃんの部屋には私たちがいるから、本日の中井家にはお父さんお母さんに高校生の子供が6人。

「順番にお風呂入ってたら夜中になるからあんたたち銭湯行きなさいねー」と言われて晩御飯の後にみんなで近くの銭湯に行くことになりました。

「私ホテルの大浴場とかは入ったことあるけど、おサイフ持って銭湯行くって初めてだ」とカミングアウトしたら、「愛ちゃんってもしかしてすごいお嬢様なの？」ってみんなに聞かれた。

「そんなことないよ。バレエやってる子の中にはすごいお嬢様もいっぱいいたけど、うちは庶民なので危うくバレエで破産するところでした」

「えー！バレエってやっぱりそんなにお金かかるお稽古事なんだ」
「最初はレッスン費と発表会の参加費くらいなんだけど、そのうち海外公演とかに参加するようになったらドーンとね。…そういえば海外公演っていえば今でも忘れられない初恋の話があるんだけど聞く？」

それは私が小学6年生で海外公演に4回目の参加をした時のこと。

ステージを終えてみんなを着替えているところに男性がやってきて、ほぼ真っ裸の私に「エクセレントなんかかんとか」と言いながらキスをした。

ちなみに私にとってはファーストキス。

その人は小さな顔と長い手足を持った細マッチョイケメンで、世界的にも期待されている若手天才バレエダンサーだったから、みんなは私のことをラッキーだって羨ましがってた。

だってものすごく高く跳んでおまけに止まってるみたいに見える人だったのよ。

私もぼーってなって、これが恋なのね…、とか思いながら着替えて廊下にでたら、その人がムキムキマツチョな彼氏とすごい濃厚なちゅーをしている真っ最中で。

「初恋はおよそ5分で終了しちゃった」

この話、バレエダンサーにとってはなんてことないバレエあるあるだけど、バレエと関係ない人にとっては突っ込みどころ満載の衝撃的な話みたいで、いつ話してもウケが良いんだよねー。

今回もウケた。

特に伊藤先輩の反応は激しかった。

お楽しみいただけただけたようで良かったです。

7. 女子会議

お風呂でムネおつきいねーとかエロいチエックを入れつつ楽しく過ごしていたら、友美ちゃんに「愛ちゃん彼氏はある？」と聞かれた。

「いないー。でも彼氏ほしいなあ。美幸ちゃんはいまでも秋本くと付き合ってるの？」

「えっ！美幸ちゃん彼氏いるの？」

「中学のとき付き合ってたよね？」

「愛ちゃんなんでそんなこと知ってるの…。いちおう、まだ別れてはないよ、たぶん。でも学校が離れちゃったし、これからどうなるかわかんナイ…」

「そっかあ、さびしいねー」

「なんかオトナ。友美ちゃんは彼氏いるの？」

「いない。いたことはあるけど別れた。有里ちゃんは？」

「彼氏なんていたこともないよー」

「そっかあ。有里ちゃんは私と一緒にだ。はやく彼氏ほしいねー」

「…伊藤先輩とかどう思う？」

「えっ？友美ちゃん伊藤先輩が好きなの？」

「違う！私じゃなくて！」

「あのね愛ちゃん、友美ちゃんは伊藤先輩が愛ちゃんのこと好きっぽいって言ってるんだよ」

「ええっ?! そうなの？」

「やっぱり美幸ちゃんもそう思った？」

「うん。でも愛ちゃんはぜったい気がつかないだろうからほっとくつもりでした」

気づかんかった。

でもこれは…。

「彼氏ゲットのチャンス…」

「いや待て愛ちゃんはやまるな」

「そうだよ。もうちよつとちゃんと考えないと」

「そもそも愛ちゃんは伊藤先輩のことどう思ってるの？」

「先輩のこと…？」

いち。先輩は時々めんどくさい。

に。先輩はたくさんおやつをくれる。

「たまに機嫌悪いとめんどくさいけど、良い彼氏になりそう」

…いえ、別に餌付けされてませんよ。

「愛ちゃんは明らかに恋愛感情とは違う基準で言ってるような気がするんだけど？」

「まあ、人それぞれの基準があるから一概に否定はしないけど…」

「とにかくはやまらない。伊藤先輩の気持ちだってまだ本当のところは分からないだし」

そうか。

まだ分からないのか。

めくるめく男女交際の世界がひろがるのかと期待したのに。

…ちっ。

「…愛ちゃんが舌打ちした」

「黒梶川愛だ」

「思いのほか腹黒いね」

失礼な。

8. ヤキモチスイッチ

ロビーでさっそく伊藤先輩の気持ちにあれこれ探りを入れようと思つたら、中井先輩に「ちよつとゴメン」と止められてしまった。

「友美。お前何を言った？」

「なんていうか、本当はもう少し穏やかにゴールデンウィークを過ごしたかったんだけど、愛ちゃんの反応が予想外で……」

「……。ちよつとあつちのほうで話そうか？」

中井先輩と友美ちゃんはロビーの隅っこですいぶん長い間話し合っていた。

なんとなく、友美ちゃんが説教されてるくさい。

中井先輩の口が小さくアタマイタイと動いた後で「梶川さんちよつと」と手招きされた。

「話はだいたい聞いた。ええと、俺も和也と直接そのことについて話したことはなくて。まわりが言うことではないし、きっと本人が言うと思うから、あの、悪いんだけど、今回の話は聞かなかったことにして、もうちよつと和也の出方を待ってて欲しいんだけど良いかな？」

こんなにまわりくどくて歯切れの悪い中井先輩はめずらしい。どうやらセンチティブな問題らしい。

「わかりました」

振り向くと伊藤先輩が激烈にカンジ悪くなっていた。

「……これってヤキモチかなあ？」

だとしたらかなり単純なヒトなんじゃないの伊藤先輩って？

「ところで、僕の平和が守られるように和也に言い訳をするとしたら何を言えば良いと思う?」

「伊藤先輩の誕生日って分かります?」

「...? 8月24日だけど?」

「じゃあなんか聞かれたら、伊藤先輩の誕生日まで秘密って言うといってください」

あとはあのめんどくさいのをどうするかだ。
ふうむ。

私は伊藤先輩の前まで行くと、肩にかけていたバスタオルを外してくるーっとターンした。

「先輩、カワイイですか?」

かわいいと思うのよ? ふあふあもこのパーカーとショートパンツとレッグウォーマー。

「カワイイ後輩にぜひコーヒー牛乳を買ってください」

コーヒー牛乳はおいしい。

伊藤先輩は良い人だ。

はやく告白とかしてほしいな。

9。 はじまりはじまり

勉強会という名目で中井家にお邪魔させていただいている以上、やはり恥ずかしくない成果をあげたい。

いつもより気合い入れて勉強させていただきました。

…中井先輩にもお泊り会の間はおとなしくしててってクギさされちゃったし。

「愛ちゃんつて、とりつかれたように勉強するんだね」
有里ちゃんがちょっと引き気味です。

勉強に入り込みすぎて、友情をお留守にしちゃった？

「んー、そんなことないよ？」

これからもうちょっと気をつけよう。

後は適当におしゃべりしながら勉強した。

楽しかったけど、ぬるま湯のような心地良さに不安になって、なかなか寝付けない。

暗記モノだけちよつとやってからもつかい寝ようかな、と思いついて、単語帳と歴史年号帳を持って部屋を出た。

中井家の2階には子供部屋とは別にセカンドリビングがあって、私たちはそこで勉強会をしている。

集中して勉強していると、だんだん心が落ち着いてくるのがわかった。

そろそろ眠れそう。

ふう、とため息をついたとたん、「終わったのか」と伊藤先輩に声をかけられた。

!!!!!!

びびびびっくりした！

大声を出さなかったってもはや奇跡だし！

「あまりムリするな」

「…もう終わりますよ？」

「勉強のことだけじゃない」

…背中が逆立つってこういうことをいうのかもかもしれない。

「なんのことかわかりません」

「そうか。…でもムリするのは感心しない」

「少しくらいムリしないと後悔しそうで不安なんです」

言い過ぎました。

伊藤先輩は「そうか」と呟くと、私の頭をひとなでして、キャラメルをひとつ剥いて食べさせてくれた。

…。

どうしよう。

こんなつもりじゃなかったのに。

…。

この人のことを好きになったかもしれない。

10. あぶないあそび

「甘いもの食べたい」

じっ…、と伊藤先輩を見つめる。

いまは私と伊藤先輩しかいない。

中井先輩がコンビニまでアイスを買に行ったとたん、ほかのみんなは勉強会をやめて友美ちゃんの部屋に行ってしまった。

「これしかないけど？」

と言いながら先輩は皿の上のチョコをつまんだ。

「…ダメだ。とけてる」

ずっと出しっぱなしだった生チョコは先輩の指先でとろりと崩れてしまった。

「いま真がアイス買って戻ってくるからそれまでガマンしてる」

「やだ」

「そんなこと言ってもこれじゃ食べれないだろ？」

ほら？とチョコで汚れた指先を差し出してくる。

「食べれるもん」

先輩の手首を掴むと、その指先をぺろりと舐めた。

人差し指と親指を丁寧に舐め上げて口に含むと、先輩が凍りついたように動かなくなった。

「…先輩、美味しい。…もっといっぱい食べたいな？」

掴んだ手首に頬をよせて、先輩の顔を見つめた。

つぎの瞬間、風のように現れた中井先輩に友美ちゃんの部屋へ放り込まれた。

「いますぐ4人もそこに正座しなさい」

無表情の中井先輩の前に並んで正座する私たち。

「どういふことか説明してもらおうか」

「えっと、ちょっとばーいずらぶマンガごっこを…」

「黙れ」

説明しろって言ったくせに黙れって言った。

「友美、いい加減にしないとお前のその腐れマンガ全部焼いて灰にするからね。松村さんと山口さんも、こういう悪ふざけは絶対にダメ」

それから、といいながらこっちを見た中井先輩はとつても怖かったです。

「梶川さんも、お泊り会の間は大人しくするって約束したよね。まして梶川さんは女の子なんだから。和也のスイッチが入ったらどうするつもりだったの？」

それはそれでありかなと思っただけけど…。

「ごめんなさい」

中井先輩が怖いので謝ったとききました。

そーっと少しだけドアを開けて覗くと、伊藤先輩がさっきと同じ姿勢のまま指先を見つめて固まっていた。

「やり過ぎちゃった？」

「当たり前だ。…この後どうする？」

「知らん顔でアイス食べたら夢だったか思ってたことにならないかなー？」

「それは無理だろう…」

でも他になにも思いつかなかったのでものまま実行しました。

11。梶川さんのお母さんって…

お泊り会二日目の夜、突然お母さんが中井家に現れた。

「お母さん何しに来たの？…なにこの荷物？」

「お土産よ。お。み。や。げ。おかげ様でパパと2人で楽しく旅行に行かせていただきました。…で、中井さんにお礼を兼ねてお土産を買ってきてみました」

それにしたって段ボール2箱はいっぱい過ぎでしょ…。

「食べ物ばかりだから消えてなくなるわよー。食べ盛りの高校生が6人もいるんだから、明日の解散までにはほとんどなくなっちゃうわよ。ヘーキヘーキ」

「そのうちの過半数は女子だし、愛たちは勉強会をしているのであって柔道部の合宿をしているのではありませんよ？」

お母さんは「良いから良いから」と手をパタパタさせると、「…で」と真顔で続けた。

「男子2人はイケメン？」

「…」

ねえねえイケメン？と目を輝かせるお母さんのために、先輩たちに荷物を運んでもらうことになった。

「うわ、すごい分量だな」

「うちとしても、さすがにこんなにたくさん頂くわけにはいかないと思います」

「久しぶりの旅行でつい買い過ぎちゃったー。でもうちの分も同じくらい買ってあるから、受け取ってくれないと処理しきれないし、そしたらパパに怒られるから困っちゃう」

えへ？と嬉しそうに笑ってごまかさないのでお母さん。
なんだか鏡を見ているようで心が折れます…。

「とりあえず母を帰したいので受け取ってください」と先輩たちに
1箱ずつ持って行ってもらった。

先輩たちのお尻を眺めたおすのはやめて欲しいと思いつつ「想像通
りのイケメンでしたか？」と聞くと、お母さんはムフフと笑った。

「想像とはタイプが違ったけど、2人ともカワイイわー。やっぱり
若いと肌のキメ細かさが違うわねー。ああ、目の保養になった。今
度はうちでお泊り会してもらおうと」

うちでお泊り会しても中井先輩と伊藤先輩は来ないよ？と突っ込む
前に中井家のお父さんお母さんがみんなを引き連れて出てきてしま
った。

「すみません、あんなにたくさん気を使わせてしまって…」

「いえ、ご挨拶が遅くなりました、梶川愛の母でございます。娘が
いない間に主人と旅行に行きましたらつい買い過ぎてしまいました。
どれも美味しいと思って買い求めた品でございますから、ぜひみな
さんで召し上がってみてくださいね？それに次回はうちでもお泊り
会をしたいと思いますからその時には遊びに来てください。では本
日はこれで失礼いたします」

びっくりよそ行きモードの挨拶を口からさらさらと垂れ流して颯爽
と帰っていかれました。

「梶川さんのお母さんって…」
黙れ。

中井先輩が私の逆鱗を刺激しそうだったので無言で制圧しておきま
した。

12。ちゆ

お泊り会の最終日。

昨日お母さんが持ってきたお土産のなかに能登牛が大量にあったのでバーベキューが行われることになった。

なんかゴールデンウィークの思い出づくりをやってこい的な意図が見え隠れしているような…。
考え過ぎ？

もう勉強会ではなくなっちゃったなーとは思うけど、中井先輩と伊藤先輩が家庭教師をしてくれたおかげでそこそこはかどったし、まあ良いや。

みんなも楽しそうだし。

肉祭り絶賛開催中です。

あれ？

でも伊藤先輩がいない。

お手伝いときはちゃんとしたのにな？

「中井先輩、伊藤先輩は？」

「あー、たぶん俺の部屋。寝てると思うわ。あいつ梶川さんのせいで寝不足気味だし」

呼んできてよ、と言ってる間も視線は肉から離れない。

…？

なんで伊藤先輩の寝不足が私のせいなんだろう？

…はっ！

中井先輩が私に伊藤先輩との接触を許可するなんて…。

恐るべき能登牛の魅力！

グツジョブ！

さ、中井先輩の気が変わらないうちに伊藤先輩に悪いことしに行かなくちゃ。

やったね。

…伊藤先輩ホントに寝てるわー。

あれあれ？

いつもよりカワイイ。

なぜ？

…。

目を閉じてるからかなあ？

伊藤先輩、なんかむやみやたらと目力強いんだもん。

…たまに見透かされたみたいで怖くなる。

まつげ長いなー。

眉太い。

鼻はゴツイけど鼻筋はきれいに通ってる。

というか顔全体がそんなカンジ。

いっこいっこのパーツが全部ゴツイのにキレイに収まってて。

おまけに背が高いわりに顔が小さいよね。

…よく寝てる。

ちゅーしても起きないんじゃないかしら？

ちゆ。

ホントに起きないや。

びっくりしてくれないと私ひどい変態みたいだわー。
がつくし。

…もうイヤや。

「伊藤先輩、起きないとお肉なくなっちゃいますよー。はやく起きてくださーい」
ゆさゆさゆさ。

伊藤先輩はゆっくり目を開けるとまっすぐに私を見た。
ちよつと怪訝そうに。

「いま…、俺になにかしなかったか？」

ちらり、と私の口を見た気がする。

あちゃー。

「揺り起こしました」

「いや、そうじゃなくて…。…。や、良いんだ。寝不足で変な夢を見ただけだ。…ゴメン」

言いながら真っ赤になって口を覆う。

「夢ってどんな夢ですか？」

ねえねえどんな夢？と言いながら顔を覗き込むと、伊藤先輩は真っ赤な顔で口を覆ったまま私の口を見てゴクリと喉を鳴らした。

「…。…なんでもない。…それより、そうだ、肉食いに行かないと肉食いに行かないと、と非常にわざとらしく連呼して伊藤先輩は部屋を出て行った。

あぶなかったー。

あやしく変質者みたいになるところでした。

13. そういつつもりではなかった

朝の創己会室ならたぶん誰も来ない。

そう思って、いつもより1時間はやく登校した。

実際、予想通りだったわけですが。

私は鞆からお弁当用クーラーバックを取り出した。

でも中身はお弁当ではない。

保冷剤。

タオル。

濡れタオル。

目薬。

ちゃんと揃ってる。

ストレスを軽減するためにはいくつかの方法があるそうだ。

ストレスについて誰かに聞いてもらう。

ため息をはく。

笑う。

そして、泣く。

とにかく出す行為が有効らしい。

実際、泣くと涙と一緒にストレス物質が排出されるそうだ。

泣くというのはなかなか良い方法だと思う。

ひとりにさえなれば他人に迷惑をかける心配がない。

というわけで。

なんだかどうしょうもなく行きづまってしまって胸が苦しいので、
平和的解決を求めて泣いてみようかと思った。

うちのお父さんを安心させるのは、新入生テストで1番をとるより難しい。

…お父さんも後悔したくないんだろう。

それは私も同じなんですけど。

物理的に解決できない問題って難しいよね？

高校受験が終わったいま、バレエを辞めた穴を埋めるのは思った以上に難しい。

梶川愛は泣きます。

30分後、携帯のアラームが鳴った。

そろそろ目を冷やさないと、泣いたことが一目瞭然の姿で教室に行くことになってしまう。

それは大変好ましくない。

お父さんから心配されているだけでもしんどいのに、友達にまで心配をかけるなんてありえない。

友達にウソ八百の言い訳をするのはツライ。

私は私なりに友達を大切にしたいと思っっているので。

目の上に用意しておいた濡れタオルと保冷剤を重ねて置いた。

…眠い。

泣いたのは失敗だったかも。

…泣くと眠い。

…。

ぐー。

「梶川……？」

はっ！

目を覚ますと開いた扉のところに伊藤先輩がいた。

……ここどこ？

……。

！

やばい！

「いま何時ですか?!」

「え? 12時半くらいだけど?」

さいあく。

人生初サボりです。

14。けっこつやらかしたね…

早朝の創己会室に隠れひとりで泣いたら居眠りこいて学校を半日サボってしまった。

昼休みに伊藤先輩が声をかけるまで爆睡でした。

これってやばいよね？

慌ててお母さんの携帯に電話をかける。

「もしもし」

ほぼゼロコールで繋がった。

その意味に血の気が引く。

「もしもし。愛です。あの、生徒会室で勉強してたら居眠りしてしまっ

「先生には登校途中で具合が悪くなったみたいですから言っているから大丈夫よ？いちおう、具合が良くなって本人がどうしてもって希望するなら登校させるけど、親としては念のため様子を見たいので欠席させるつもりですとも言っているから、この後は愛のしたいようにしたら良いと思うけど、せっかくだからサボっちゃったら？」

百点満点の言い訳をありがとうお母様。

「でもさすがにサボるわけには…」

と思ったけどムリだ。

ひどい顔してる。

鏡を見て愕然とした。

目のまわりが赤い。

居眠りしてきちんと冷やさなかったからだ。

ステロイド入りの軟膏とかも用意すべきだった。

…いやそういう問題じゃない。

「サボります。この件お父さんには？」

「言っていないし言うつもりない。あのね、パパは愛に一点の曇りもなく幸せになってほしいと思ってる親バカも甚だしいヒトなんです。だから、気にしないで良いのよ？」

昨日、新入生テストの順位が書かれた成績表を手に困惑気味な様子で「もつと普通で良いんじゃないか？」と呟いたお父さん。

普通ってなに？

「分かってる。ありがとう」
気持ちを遮断して電話を切った。

…あとは伊藤先輩をどうするかだ。

間違いないイロイロとまずい現場を押さえられてしまった。
こういうときの伊藤先輩は怖い。
ふせておきたい感情を見透かされる気がする。

そういうの苦手。

攻撃的な自分が出てくるから。

出来れば誰も傷つけない。
伊藤先輩のことも。

…それから自分のことも。

15. エスケープ

「泣いてたのか？」

心配してるのか呆れてるのかよく分からない声で言われた。

そりゃ、濡れタオルやら保冷剤やらの後始末グッズを並べて泣くなんて、呆れるよねえ。

「えっと、ちょっと新車のストレス解消法を試してみたんですけど、思いがけず爆睡してしまいました…」

えへへ？と笑ってごまかしたけどダメっぽい。

…なんかお怒りっぽい。

怖いし。

「ムリするのは感心しないって言わなかったか？」

「あの、べつになにかムリしたから泣いたわけではないです」

「じゃあなんで泣いてたんだ」

そういう追求やめて欲しい。

伊藤先輩には関係ない。

みたいな攻撃的な言葉が口滑って出そう。

「お年頃だからかなー？」

ボケてごまかすつもりだったのにトゲのある声になった。

…ちよつとイラつとはしてるし。
失敗した。

伊藤先輩、分かりやすく傷ついた顔しないでください…。

「スミマセン…」
なんか自分自身のふがいなさに泣けてきた。
涙腺に道がついちやっただカンジ？

「いや、俺こそ」
と伊藤先輩がなにか言いかけたところで昼休み終了5分前の予鈴が鳴った。

もうちょっと落ち着いてねばれば時間切れだったのに…！
ちよつとしょつく。

と思ってる前で伊藤先輩は電話をかけはじめた。

「真？悪いけど俺体調悪いから帰ったことにしといて」
え？

「鞆？適当に隠しといて。うん。じゃあそういうことで」
そういうことってどういうことだオイ。

「じゃあ梶川は帰るしたくしろ」

…うむを言わせぬ口調ってこういうことなんだろうな。

一方の伊藤先輩はテキパキと棚からファイルに入ったプリントを何枚か選び出すと、フィルムファイルにまとめてから付箋を取り出してなにかメモして貼って創己会長席に置いた。

次に各委員会の名前が書かれた名札を机に並べていく。

そういえば今日は放課後に運動会運営についての創己会議があるんだった。

つまり、伊藤先輩がやっているのは本来私がやるべき仕事だ。

「あの、私やります」

「帰り支度は済んだのか？じゃあ保温ポットと湯呑み人数分出しといて」

伊藤先輩はポットにもメモした付箋を貼った。

続けざまに黒板に今日の議題と会議内容を書いていく。

達筆なうえに速い。

会議内容が完璧に頭にはいつているらしい。

一切メモとか見ないし。

「じゃ、行くか」

「え、そういうわけには」

「コピーとお茶くみは三井と藤井にふつといたから」

それはありがとうございます。

でもそうじゃなくて伊藤先輩までサボる必要ないよねってことを言いたかったんですけど？

「ここでグズグズして俺と一緒にサボってるところを見つかりたいならここに居ればいいだろうが、俺個人としては5限が終わる前にエスケープできたほうがありがたい。分かるか？」

…。

私もそのほうがありがたいです。

16. おやつでキョン

なんだか意図しないまま学校をサボることになってしまった。

伊藤先輩と一緒にだなんてバレたら生活指導室直行？

ぴーんち。

と思ってるわりにちゃっかり伊藤先輩のお宅にお邪魔しているワタシ。

だって朝から大泣きして赤パンダなのにお母さんのいる家には帰れないし、下手に外うるうるして補導されたり通報されたりしたくないし。

うん、しかたないしかたない。

伊藤先輩が連れてきてくれたんだもん。

伊藤家のご両親は2人とモシステムエンジニアで頻繁に出張があるうえに普段も夜10時前に帰宅したら早いほうなんだって。

そして伊藤先輩の家が私の通ってた小学校区内にあっつてびっくりでした。

小学校も中学校も同じとこ通ってたってことだよな？

ぜんっぜん知らなかったんですけどー。

「俺は名前だけは知ってたけどな。梶川愛は有名人だったし」

はー、私って有名人だったんだ。

「だから、最初に顔合わせした時はバレエで学校行事すらまともに参加してなかったくせにうちの高校に首席入学できるってなにそれ、とか思ってたイラっときた」

こわ。

「でもすぐいっぱい勉強したんですよ？」

「いまはそうだったんだろうと思うけど、その時はバレエ辞めてるなんて思いもしなかったから」

だよー。

私も辞めるなんて思わなかったし。

「なんで辞めたんだ？」

「ものすごいお金がかかるからです」

「…」

「あと父も、私が普通の学校生活を送っていないと気にしているよ
うでしたから。で、バレエダンサーからリア充高校生にジョブチェ
ンジしてみたんですけど、なかなか修業が足りないみたいで…」
やばい。

また泣けてきた。

このネタは泣ける。

「梶川はムリしすぎ。見ててたまに腹立つ」

そっいいながら、缶入りクッキーを開けて1枚食べさせてくれた。

なんでだろう？

先輩におやつをもらうと心臓がキュンってなる。

やっぱり好きなのかな？

じ、と見つめてたら目が合った。

「もう1枚食うか？」

いや、そういう意味ではなかった。
でも食べます。

あーん。

もぐもぐしてたら伊藤先輩が赤くなって目をそらしてしまった。
いまのスイッチまじ分からん。
なんで赤くなっただろ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8198y/>

思春期スイッチ。

2011年12月11日07時45分発行